

高速電子単環根巻きボタン付けマシン **AMB-289**

国内工場は売り場のフォロー生産に特化する 短納期・クイック生産にあわせて設備を導入

クラスター

池田宜隆さん

月曜日に受注して、金曜日に出荷

創業は1990年とアパレル工場としては比較的新しい。当初は企画が主だったが、「アパレルは製造が基本、自社で作らないと状況が分からない」と製造を始めた。後発だけに先人の知恵を十分に吸収して、新しい発想でアパレルのモノづくりに取り組む。元気な新しいタイプのアパレル工場である。

アイテムはジャケットが中心だが、難しいものを手がけることが多い。そのために工夫が必要だが、そこは企画を手がけていた強み。「段取りや加工法を工夫して、採算に合わない仕事を見事に採算に載せる」(小寺ミン商会小寺功一さん)。強さの秘訣は柔軟な発想と設備を活用したものづくりにある。

ブランドは、CECIL McBEE、スマート・ピンク、Boysなどだが、「国内は、売り場のフォロー生産です。月曜日に受注して週末に納品しますので、そのために何でもできるように必要な設備を導入しています。それも難しい仕事をやさしくこなす重要な強みの一つになる」と池田宜隆さん。

中国工場を活用する“コツ”……は、
競争させることで努力を促す

同社は中国でも生産を行い、3つの工場で約1,000人のラインを借りている。

「中国工場の設備は部分的に日本工場より良いものが入っていますし、品質も良くなってきています。しかし、生産性は日本の工場のほうがいい。中国で作るとジャケットは1人一日4枚くらいしか出来ませんが、日本で作ると7枚はできる。それだけ技術が違うということですね」(池田さん)。

ご自身ユニフォームの企画もやっけていて、いわばアパレルだが、在庫はゼロ。国内工場も仕事は増えそうだが、これ以上は大きく

しないという。国内で大きくして体制を維持するのは難しい……ということのようだ。

今後の期待は中国。中国でうまく生産するコツは3つの工場を競争させること。無条件で発注はしない。その危機感で工場が努力するようになるとのこと。今後は、杭州のラビットの皮革を使った商品を作る予定」とか。期待したい。

クラスター

本社：岐阜県大垣市熊野町

創業：1990年

社長：代表 池田宜隆

従業員数：13名

生産品：ジャケット、コートを中心に婦人服全般



「店舗から直接受注することで、国内市場のフォローが可能になるとおっしゃる池田宜隆さん。」



「上手にミンを使われます」と工夫に感心する小寺ミン商会の小寺功一さん。



中国人研修生が主だが、難しい加工もこなす技術の高さが売り。教えるのは日本の考え方だ。



高速電子単環根巻きボタン付けマシンAMB-289。このほかにも、ポケットセッター、鳩目穴かがり、眠り穴かがりミンなどもある。13名という規模にしてはミンは豊富だ。



ボタンホックの止め布は剣先型をしている。この加工も工夫の見せどころである。

ドライヘッド一本針自動糸切りミシン **DDL-9000S**

特殊な工程は自社でも加工を引き受ける 最終工程だから油汚れのないドライヘッドが不可欠

安藤ミシン商会

安藤博之さん、安藤直樹さん

仕事は若い2代目同士で広がる

「先代が創業したのは昭和48年、ちょうどオイルショックの年で、それまで景気の良かったアパレル工場はとたんに景気が悪くなった。仕事はそれ以来ですから、いい思いをしたことがありません」と笑うのは安藤ミシン商会の2人の経営者、安藤博之さんと直樹さん。31歳と29歳のご兄弟で、平成9年からの息の合ったコンビぶりは、御付き合いの縫製工場の社長さんからの評価も高い。

「仕事は忙しいです」とおっしゃるが、縫製工場の2代目の若い経営者の方々も、同じように若い感覚を持ったミシン屋さんを好むことから、自然と元気な工場とのお付き合いが増えるため。上り坂だから、仕事が忙しいというわけである。

ホームページが大活躍

忙しい理由はもう一つ。3年前から始めたホームページ。縫製の豆知識もあってなかなか便利と評判だ。博之さんの担当だが、ミシンの価格を明記し、また小物やパーツも掲載していることから、全国から注文が来る。家庭用の古い足踏みミシンのベルトの注文も多く、これまでに少なくとも100本は売っているという。埼玉県

の75歳の方が、50年間使用した愛用のミシンのベルトが切れて困っていた所、安藤ミシン商会さんのホームページを知ってミシンがよみがえった。不思議なことに自分も元気になった……という記事も新聞で紹介された。

特殊なミシンが必要な工程を引き受ける

「景気に左右されるミシン販売だけでなく、もう一つ事業を、と始めたのが縫製です。ただ、工場さんが困っている工程を引き受けるということで始めましたので、穴かがり、ボタン付け、大きなサイズの閉止め……などの工程を引き受けています」と博之さん。

最近、受けた仕事で、白い難素材があり、油汚れが厳禁……ということで、ドライヘッドの本縫いを導入した。縫製作業は、お母さんや奥さん方の担当。工場はそのままお客さんに見てもらって展示室に活用できるところがメリットでもある。

カタログ、ホームページとしっかり営業アイテムをそろえた同社が忙しいというもうなづける。

安藤ミシン商会

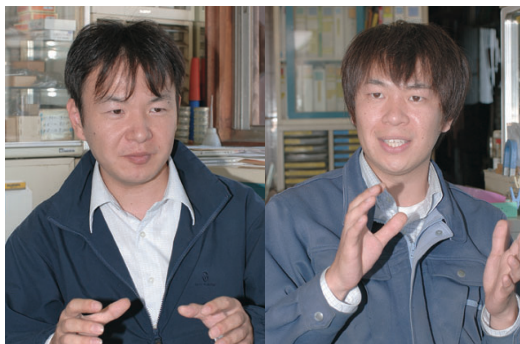
本社：岐阜県羽島郡笠松町西金池町

創業：昭和48年

社長：安藤 博之

従業員数：4名

生産品：ミシン販売店として、特殊工程のみ加工



「縫製工場の2代目の若い社長さんたちは、若いミシン屋の方が話が合っているようです」とおっしゃる安藤ミシン商会の安藤博之さん(左)と安藤直樹さん(右)。それぞれ独自にお客さんも持って、忙しい。



独自のカタログを印刷して配布する。ここ数年忙しいですとおっしゃる秘訣はこういうきめの細かいサービスにある。



ドライヘッド一本針自動糸切りミシンDDL-9000S。ほかに、鳩目穴かがり、眠り穴かがりミシン、電子サイクルマシンなどもある。自社の工場でするミシンはそのままお客様に使用事例として展示できるというメリットもある。



博之さんが担当するホームページ。アクセス頻度も高く、全国から注文が寄せられる。
<http://www.andomishin.com/>